

教科書教材から

1年生の前の教科書には載っていた「おむすび ころりん」を読むようにしています。
初めての子にも、リズムがあって読みやすいようです。

読み通した後で、教科書を閉じます。

お話を絵カードにしたのを子どもの前に並べて、

「順番に並べていこう」

と話します。

「山の畑を耕して、・・・」と話しながら、絵カードを選んで一番のところにおいていきます。

同じ調子で、並び替えてみるのもいいです。

または、子どもに任せてみるのもいいです。

こくご1年の下の教材になぞなぞをつくろうがあります。

そこに出てくるのをまねして、子どもに問います。

「てんきのいい日は、いっしょにおでかけ。

雨の日は、いえでおるすばん。

かぜがふくと、とんでいかないように、あたまをおさえます。

これなあに。」

「おそうじ大すき。

ふけばふくほど、くろくなるものなあに。」

と

1年のこくごの教科書に

「きょうは、なん月 なん日 なんよう日です。」

というところがあります。

日付の読み方は学習していますが、ここでもう一度、

「ついたち」「ふつか」「みっか」の読み方を復習します。

「じゃあ、明日は何月何日何曜日ですか」

「じゃあ、昨日は何月何日何曜日ですか」

と質問してみます。

カレンダーを見ている子はできますね。

一週間がわかっている子はできますね。

「あさって」「おとついで」になればできるでしょうか。

「ザブーン、ジャバ、ジャバ、ジャバ。」

「はんぶんずつ すこしずつ」のくまじいさんが魚を捕まえようと川に入り、歩いている音です。

いすの上に立ちます。

「ザブーン、ジャバ、ジャバ、ジャバ。」

と声に出して、とびおりて歩きます。

子どもにも動作化させます。

そのとき

「チャポーン、ピチャ、ピチャ、ピチャ。」

と言います。

「何か変だね」

と違いを考えてみるのもいいと思います。

1年の1学期の終わりには、漢数字が出てきます。

横一列に「一」から「十」まで視写します。

そして、「一」と書き、つづけて「つ」と書きます。

「一つ」をさして、「ひとつ」と読むよ。と教えます。

また横一列に「二つ」「三つ」「四つ」「五つ」・・・と書いていきます。

次はエンピツの数を数えます。「何本ですか。」と問います。

「一ほん」「二ほん」「三ほん」「四ほん」と数えていきます。

問いに答えて、書いていきます。

数によって読み方が変わります。

ものの数え方が1年の国語の教科書に出てきます。

えんぴつを数えるときには、

1ほん 2ほん 3ほん 4ほん 5ほん 6ほん 7ほん 8ほん 9ほん 10
ほん

実にややこしい。

1、6、8、10のときは半濁音になります。

2、4、5、7、9のときは清音のままです。

3のときは濁音になります。

漢字の「本」で書いてしまえば、このややこしさはなくなります。
しかし算数では、はやくから、「なんぼんですか?」という問題がでてきます。
子どもは「8ぼん」と答えてしまいやすいです。
園の送り迎えのときに、電信柱の数を数えたり、
空き瓶をごみに出すときに、手伝ってもらいながら数えたり、
散歩のときに、咲いている花を数えたり、
しながら覚えさせてあげてください。

一年の教科書にお正月の様子が絵で描かれています。
外では子どもたちが「たこあげ」「こままわし」「ゆきうさぎ」「おしくらまんじゅう」
をしています。
ゆうびんやさんが「ねんがじょう」を届けてくれています。
お正月らしい絵です。
しかし、なぜか「はごいた」の「はねつき」はありません。
そのかわりかどうかわかりませんが、「ラケット」でうちあう「バトミントン」らしい
絵があります。
家の中では「かきぞめ」「かるた」「すごろく」で遊んでいます。
食卓の上に「じゅうばこ」があり、家族で「おせちりょうり」を食べています。
「じゅうばこ」や「おせちりょうり」「かきぞめ」を知らない子も多いです。
一年に何度も聞くことばではありませんから、覚えていないのでしょう。
ここで教えておきます。
「おおみそか」「もちつき」「としこしそば」「じょやのかね」「はつもうで」「まつ
かざり」「おとしだま」
などのことばも話しておきます。
なぜ「はごいた」でする「はねつき」がないのだろう。

1年のこくご下の教科書に「くらべて せつめいしよう」という題材があります。
そのときに絵カードを使い、表現方法を学びます。
大小、長短、高低、多少関係を理解し、比較の表現を学びます。
共通点や似ているところを探し、表現方法を学びます。
ちがうところを探し、表現方法を学びます。
ぞうとありの絵カードをならべて
「ぞうは ありより おおきい。」
「ありは ぞうより ちいさい。」

「大きさを くらべると、大きいのは、ぞうの ほうです。」

「大きさを くらべると、小さいのは、ありの ほうです。」

子どもの筆箱にあるえんぴつや消しゴムを使い、背比べや大きさ比べなどもできそうです。

えんぴつとクレヨンの絵カードをならべて

「えんぴつも クレヨンも かくときに つかいます。」

「えんぴつと クレヨンは、どちらも かくものです。」

えんぴつで ノートに じを かき、クレヨンで がようしに えを かきます。」

以前の国語の1年の教科書に「じどう車 くらべ」という題材がありました。

その内容をヒントに考えてみました。

電化製品の絵カードを使って、そのはたらきを説明させます。

こんな質問をします。

どんなときに使いますか？

どのように使いますか？

どこにありますか？

どんな形をしていますか？

これがあることで、どんなことが助かっていますか？

もし、これがなくなれば、どんなことがこまりますか？

1年の教科書に「だいじな たまご」という題材が載っています。

それをまねして、「ためです」作文を書いてみようと思います。

男の子が寝込んでいる絵カードを見せて、

「男の子がどうしていますか？」「ねています。」

「なぜですか？」「かぜをひいたためです」

「どうして頭を冷やしているんですか？」「ねつをさげるためです。」

とやりとりしながら、「だいじな たまご」風に作文します。

1年こくご上の教科書に「どうぞのいす」がのっています。

ここでは、文のたし算が勉強できます。

「ろばさんは いすに かごを おろしました。」

「(ろばさんは)ねてしまいました。」

この二つの文をたして、教科書には

「ろばさんは いすに かごを おろして、ねてしまいました。」

と書かれています。

また「(くまさんは)はなを かかえました。」

「(くまさんは)かわりに みつを おいて きました。」

この二つの文をたして、教科書には

「(くまさんは)はなを かかえると、かわりに みつを おいて きました。」

と書かれています。

このことを話した後、

文のたし算を子どもにさせます。

給食を配っている絵カードを見せて、文を作ります。

そして、給食を食べている絵カードを見せて、文を作ります。

つぎに文のたし算です。

「きゅうしょくを みんなに くばって、たべました。」

「きゅうしょくを みんなに くばって、いただきますを しました。」

こんな文ができました。

「したこと おしえて」で

「～で ～を つくりました」の文型を学習した後、

絵カードを見せ、「で」「を」つかって文つくりをします。

「せっけんで てを あらいます。」

「つみきで おしろを つくります。」

「クレヨンで えを かきます。」

「はさみで かみを きります。」

「ぞうきんで つくえを ふきます。」

「あみで むしを つかまえます。」

「スプーンで アイスクリームを たべます。」

なにで なにを どうするの文型の習得をはかります。

1年のこくご下の教科書に「くらべて せつめいしよう」と言う題材があります。

そのときに絵カードを使い、表現方法を学びます。

大小、長短、高低、多少関係を理解し、比較の表現を学びます。

共通点や似ているところを探し、表現方法を学びます。

ちがうところを探し、表現方法を学びます。

ぞうとありの絵カードをならべて

「ぞうは ありより おおきい。」

「ありは ぞうより ちいさい。」

「大きさを くらべると、大きいのは、ぞうの ほうです。」

「大きさを くらべると、小さいのは、ありの ほうです。」

子どもの筆箱にあるえんぴつや消しゴムを使い、背比べや大きさ比べなどもできそうです。

えんぴつとクレヨンの絵カードをならべて

「えんぴつも クレヨンも かくときに つかいます。」

「えんぴつと クレヨンは、どちらも かくものです。」

「えんぴつで ノートに じを かき、クレヨンで がようしに えを かきます。」

1年生のこくご上に「みつけたよ」の題で絵が載せてあります。

この絵を使って、「みつけたよ」作文を書きます。

はじめは、絵を見せて、

「これはなに？」

と問い、何を見つけたのか、応答させます。

答えは単語カードに書かせます。

指導者は「かえるをみつけたよ」と言って、子どもにリピートさせます。

つぎに「どこにいますか？」

と問い、その生き物がどこにいるか、応答させます。

答えは単語カードに書かせます。

指導者は「いけでみつけたよ」と言って、子どもにリピートさせます。

そして「この人はだれ？」

と問い、だれが見つけたのか、応答させます。

答えは単語カードに書かせます。

「おとこのこがみつけたよ」と言って、子どもにリピートさせます。

子どもの「答えた三つを「が」「で」「を」で、つないでみるよ」と言って一文にならべていきます。

「おとこのこ」「が」「いけ」「で」「かえる」「を」「みつけたよ」

はじめは、指導者が組み立ててみて、読んでみます。

子どもにも読ませてみて、ばらばらにします。

「できるかな？文にしてみよう。」

と指示します。

いくつか例示してあげるとできるものです。

「みんな なかよし」

1年の国語の教科書はこれではじまっています。

絵を見て、「ここはどこかな?」「子どもの部屋かな?」

「たくさん子どもがいるね。」「1年 組の子かな?」

「このめがねをかけている子は誰かに似ていない?」

「女の子も誰かに似ていない?」

「みんなで何を見ているのかな?」「おおきいね。」

「何を話しているのかな?」

「この島の名前はなんていうんだろうね?」

と問い、子どもの答えを待ちます。

1年の教科書に「天に のぼった おけや」の話が載っています。

挿絵を見ながら、文を作っていきます。

挿絵を指差しながら、「だれが?」「どこで?」「なにをしているの?」と順番に問います。

「おけやが」これは登場人物がわかれば、答えられます。

「くもの上で」これは前の場面でくものうえにのぼったおけやがかみなりに頼まれたことがわかっていれば出てきます。

「何をしているの?」の問いには、自分のことばで答える子と教科書のことばを使って答える子に分かれます。

「雨を ふらせています。」

「雨の たねを まいています。」

どちらを高く評価するか難しいところです。

しかし、教科書のことばに忠実であってほしいと願います。

自分のことばで答えることが必要になることがあります。

しかし、文章の読み取りをしています。

かみなりがたのむときも

「この水ぶくろから、あめの種をちくちくまくだけでええのや。・・・」と言われていきます。

挿し絵になっているところの表現では

「おけやもあめのたねをちくちくまく。」

と書かれています。

だから、後者を高く評価します。

1年こくご上「おおきな かぶ」

さし絵を見ながら、文を作っていきます。

さし絵を指差しながら、「だれが?」「なにを?」「(だれを?)」「どうしているの?」と順番に問います。

「おじいさんが かぶを ひばって」

と文を作ります。

逆に「なにを?」「(だれを?)」「だれが?」「どうしているの?」と問うてみます。

「かぶを おじいさんが ひばって」

と文を作ります。

助詞の使い方を誤ると、

「かぶが おじいさんを ひばって」

になってしまいます。

こういう子がいたら、

「なにを?」「だれが?」と問うときに、答えの絵を指差してあげれば良い場面ごとにさし絵があります。

練習することができます。

指差しをしないで「なにを?」「だれが?」に答えられれば良いと思います。

たとえ、誤っていても、書いてみると助詞の誤りに気づく子がいます。

それも誤っているときは、正しく助詞を使った文をリピートさせ、終わります。

1年の教科書のはじめは、「みんな なかよし」です。

「あ」「い」「う」「え」「お」「か」「し」「た」「な」「ま」「み」「よ」「ん」のひらがなからできています。

ひらがな文字のあ～わ行の10行のうち、「あ」「か」「た」「な」「ま」の5行のあ列の文字がでてきます。

この行の発音は、早い時期に獲得される音です。

この発音を獲得しているか、確認できます。

つづいて、母音のひらがなとその口形がでてきて、母音が語頭につくことは集めをしています。

そのことばには、入学前にやっと獲得されるう行の音、サ行の音、チ音、ツ音がでてきます。

ここで、その発音を獲得しているか確認できます。

国語の1年の教科書に「大きなかぶ」という話が載っています。

そのなかに、このような表現があります。

「うんとこしょ どっこいしょ。」に続いて、

「けれども かぶは ぬけません。」

「それでも かぶは ぬけません。」

「まだまだ かぶは ぬけません。」

「とうとう かぶは ぬけました。」

とあります。

「けれども」「それでも」「まだまだ」の後は、

「ぬけません」と続きます。

「とうとう」の後は、

「ぬけました」と続きます

このつながり方を間違えると「ことば違い」になります。

1年生もこの時期になるとたくさんの漢字を学習しています。

読みをいって漢字を書かせるのもいい方法ですが、こんなのはどうでしょうか。

ノート一番上のマスに「日」と書きます。

そして、「この漢字はなんて読む？」と聞きます。

つぎに「この漢字に似ている漢字、知っているかな？」と聞きます。

一年生の漢字でも結構出てきます。

「大」「土」でもやってみます。

3年の下の教科書に「がんばれ わたしのアリエル」という教材があります。

その中に「もうどう犬になる犬は、子犬のころ、パピーウォーカーという里親ボランティアの家に

10ヶ月ほどあずけられて、しつけをうけ、人間とのふれあい方をおぼえさせられる。」
と言う文があります。

書いてある通りに質問するとしたら

「もうどう犬になる犬は、子犬のころ、なんという家に10ヶ月ほどあずけられますか」

「そこで何を受け、なにをおぼえさせられますか」

逆から問うとしたら

「パピーウォーカーと言う里親ボランティアの家に10ヶ月ほど預けられるのはだれ

ですか」

となるのでしょうか。

もう一段レベルを上げると

「パピーウォーカーは、だれを預かり、何を覚えさせるのですか」 となるのでしょうか。

3年下の国語に「モチモチの木」という題材が載っていました。

霜月二十日のばんの場面で次のような問いを考えました。

1、書いてあるとおりに問う

- ・ 霜月二十日のうしみつに、何に灯がともるのですか？
- ・ それをだれが見たことがあるんですか？
- ・ それは、何と言うお祭りなんですか？
- ・ それを見ることができるのは、だれだけなんですか？

2、書いてある順番に問う

- ・ 霜月二十日のばんに、何が起きるんですか？
- ・ じさまは、それをなんと言っていますか？
- ・ どんな子が見ることができると言っていますか？

3、書いてあるのとは逆に問う

- ・ 勇気のある子は、何を見ることができるんですか？
- ・ それを山の神様の祭りと言っているのは、だれですか？
- ・ 山の神様のお祭りはいつあるんですか？

4、問いに答えて、カードに書いて、対応する

- ・ 山の神様のお祭りはいつあるんですか？
- ・ だれが見ることができるんですか？
- ・ どんなお祭りとじさまは言っていますか？

と問い、答えてから、カードに書きます。

そして、

「いつ」「だれが」「どんな」「なにを」「(カードを提示しながら)見ることができるんですか？」と問い、

子どもが書いたカードと対応させる。

5、問いに答えて、文章化する

4の問いに答えてから、一文ずつ書く。

たとえば、

山の神様のお祭りは、霜月二十日のばんにある。

勇気のある子だけが、見ることができる。

モチモチの木に灯がともる。

